

論文審査の要旨および担当者

報告番号	甲 第 号	氏 名	鷺谷 佳宣
論文審査担当者：	主査	慶應義塾大学大学院 教授 博士（システムデザイン・マネジメント学）	当麻 哲哉
	副査	慶應義塾大学大学院 教授 博士（システムエンジニアリング学）	白坂 成功
		慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科附属システムデザイン・マネジメント研究所 顧問 博士（工学）	高野 研一
		近畿大学経営学部 教授 博士（商学）	山縣 正幸
		立命館大学経営学部 教授	八重樫 文
（論文審査の要旨） 鷺谷佳宣君提出の学位請求論文は、「デザイナー組織におけるチームワーク向上メカニズムの解明と改善手法の開発」と題し、全 10 章から成る。学位審査においては、システムデザイン、組織、経営、デザインの各分野の専門家で構成された副査 4 名体制の審査委員会を設置して学位審査を行った。 従来、デザイナー組織において、専門能力の発揮とチームワークの向上が相反するものとして捉えられがちであり、「チームワークを高めると創造的な専門能力が阻害される」という懸念からチームパフォーマンスの低下が見られても適切な対応が取られないという課題が存在する。しかし、これまでの様々なチームワーク理論では、創造的实践におけるデザイナー組織の相互作用を適切に説明できないという本質的な限界がある。この課題に対して本研究は、組織行動論研究、デザインマネジメント研究、プロフェッショナル研究という三つの研究領域の交差点に位置づけられ、質問紙調査による量的研究とインタビュー調査による質的研究を統合した混合研究法を採用し、デザイナー組織の複雑な現象を多角的に捉えたものである。 研究の結果、事務職組織では、タスクワーク（個人の創造的業務遂行）とチームワーク（協働活動と学習）が相互に影響を及ぼし合う構造を持つのにに対し、デザイナー組織では両者が独立して機能する特徴が明らかになった。具体的には、第一の経路は、リーダーシップとフォロワーシップの発揮がチームワークを介して業績に影響を及ぼす「協働プロセス経路」である。第二の経路は、個人の業務遂行能力（タスクワーク）の発揮がやりがいに直接影響を与える「創造的自己実現経路」である。この二重構造の発見は、デザイナー組織における創造性と協働性の両立メカニズムを説明する重要な理論的貢献となる。 この知見に基づき、三つの具体的な改善手法を開発した。まず PM 理論に基づくリーダーシップ向上手法では、目標達成機能と集団維持機能の両立を通じて、創造性を尊重しつつ組織的一貫性を確保するアプローチを確立した。次に批判的・積極的・配慮的行動を促進するフォロワーシップ向上手法では、専門性を発揮しながら建設的な協働を実現する能力開発プログラムを構築した。そして、経営理念浸透研究をパターン・ランゲージで分析した方針共有向上手法では、暗黙知の形式知化と組織的共有を同時に実現する革新的な手法を開発した。これら三つの具体的な改善手法を開発したうえで、三つを統合した「デザイナー組織チームワーク向上統合フレームワーク（DOTEIF）」を提案し実証的な確認まで行った。本研究により、専門職文化と組織的協働のバランスを図る具体的な施策を確立し、デザイナーの役割が「造形者」から「翻訳者」「媒介者」へと変容する中での能力開発の方向性を示した。 以下、本論文の構成を説明する。本研究は序論から結論までの全 10 章で構成され、第 1 章では、従来研究の限界から、デザイナー組織の課題を設定し、その解明と改善の目的について説明した。第 2 章では、先行研究を整理し、本研究全体の枠組みの構築について述べた。第 3 章では、研究のアプローチについて記述し、第 4 章においてチームワーク向上メカニズムを解明するための実証研究の結果を示した。第 5 章から 7 章にかけて、上記に述べたリーダーシップ向上手法、フォロワーシップ向上手法、方針共有向上手法の三つの手法の開発とそれらの評価について記述し、それらを統合したフレームワークの提案と評価を第 8 章で行った。第 9 章では本論文全体に対する考察を行い、第 10 章に結論としてまとめた。 本論文は、組織行動論の観点から、タスクワーク（創造的業務遂行）とチームワーク（協働と学習）の相互作用という専門職組織特有の複雑なメカニズムを解明し、チームワーク理論を創造的实践の文脈へと拡張するとともに、デザイナーを抱える組織の専門職文化と組織的協働のバランスを図る具体的な施策を提案して組織におけるデザイナーの能力開発の方向性を示すことで、理論と実践の両面で重要な意義を示したことに価値があり、システムデザイン・マネジメント学の発展にも寄与するところが少なくない。また、審査では英語によるプレゼンテーションと質疑応答も行い、十分な英語能力も確認している。 このことから、システムデザイン・マネジメント研究科における博士学位論文として、博士（システムデザイン・マネジメント学）の学位を受ける資格が十分にあるものと認め、審査委員会の主査、副査の全員一致で合格と判定する。			